

先行オルグと閲読後の内容討議での役割による理解の差 (II)

教示による討議集団内対人態度の変容

光田 基郎¹

(¹大阪教育福祉専門学校)

キーワード：散文理解，内容討議の役割，類推

Elaboration of instructional aids in computerized text comprehension tasks (II)

Motoo MITSUDA¹

(¹Osaka Technical College of Childcare and Welfare, Osaka 544-0023)

Key Words: Collaborated text reading, analogy, instruction

This study showed effects of leadership on collaborative text comprehension remarks. Detrimental effects of affinity on analogy use were stressed.

目的： 散文閲読後に小集団で内容討議する際の集団内の役割（指導者，参加者，全員対等）と教示による集団内対人態度の変化を指摘する。閲読内容の想起では全員に下記の詳細な手掛かりを与え，討議による不完全な初期理解の共有の低減を試み，小集団討議での対人態度と類推の関連を指摘する。
方法： (a) 「実業の日本」誌'92より「情報量と分析の必要性」を述べた箇所を書き改め，「湾岸戦争前にトルコは石油関係の利害と無縁ゆえにイラク軍動員の噂から隣国侵攻を予測したが，米国は衛星で軍の移動を見ても石油価格操作での示威と誤解した。日本政府は欧米と商社の情報に頼るゆえに，通産省役人が職務上知り得た情報を目安に株のインサイダー取引しても役所向けに予め操作された情報を過信して大損した例や，マスコミの報道が記者クラブで事前に操作された情報ゆえに不確実なのと同然。賢明な商社幹部はトルコ帝国の官僚支配から類推してソ連崩壊を予測し，徳川家康は戦時の情報途絶に備えて常に忍者を確保し，情報分析は参謀の他に僧や女性の知恵も活用」の内容31文を保育専門学校生51名に画面で閲読させて，7-8人の小集団で10分間の内容討議を求めた。(b) 1/3は全員対等の討議群，残る各群内の3-4名はアシテータ，それ以外は生徒役である。半数の群は事前に上記の「情報量と分析の必要性」に関する先行オルグを与えた。閲読後は全員に「石油関連の利害と無縁ゆえ，砂漠の住民の噂からイラク軍の意図を隣国侵攻と判断したトルコと，軍の動きを衛星で見た後，石油価格の操作意図での示威と思う米国の類似度を5段階評定せよ」など上記の文に下線で示す7項の特徴を明示し，上記の集団内の役割と教示の組み合わせ計6群別に項目間の類似性判断とその確信度評定値を得てd'に換算した。(c) 集団内対人態度は，思考動機，同調，内面に配慮，討議と思考意欲，集団内と個人別にリーダー（フオワード）シップ，課題志向性と親和性の評定値を求めた。(d) 文の逐語/推理再認検査6項，その下位技能（閲読と無関係の類推，「d, c, e, b?」の系列の推理，「松，杉，桧と縦→横」の過剰類推ほか（日本心理学会'17で発表）の各々に選択反応とその確信度を求めた。
結果： (a) (i) 図1は上記の集団内課題志向性評定値（d'）である。2要因（教示 x 集団内の役割）分散分析して，2要因交互作用（5%）が得られた。この結果は，アシテータ役が無教示条件で高い課題志向性を示すほか，教示効果が生徒役で顕著に示された結果に関しては，閲読内容の討議から生じた不完全な初期理解の共有がアシテータによって是正されたと言えよう。(ii) 課題志向性の自己評定値と類推との相関を求めて2要因共分散分析した結果，2要因交互作用が得られた。この相関係数値の各々は，教示条件下のアシテータ役（.502） > 生徒役（.259） > 対等（-.039），無教示でアシテータ役（.539） > 生徒役（-.624） = 対等（-.637）を示す。小集団内で感じられた課題志向性の評

定値と類推値と類推得点との相関係数値も上記と同様の相互作用（5%）を示した。(c) 集団成員の親和性と周囲の評価への不安から沈黙する態度得点との高い相関係数値（5%）からは，生徒役が教示の有無に関わらず自らの発言に対する反応を意識する態度を指摘し得よう。(d) 教示と役割別に集団内のリーダーシップの評定値と上記の親和性の相関を求めて2要因共分散分析した結果，役割の主効果（5%）を得た。

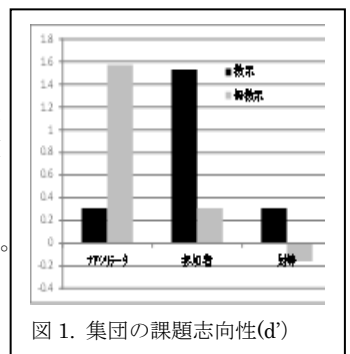


図1. 集団の課題志向性(d')

この結果は教示の有無を問わず，生徒役の相関係数値が最大，教示条件では参加者以外は負の相関係数値を示す結果と対応。(e) 表1は上記の推理再認成績が平均値以上かを従属変数とした判別分析である。リーダーシップ，親和性と課題志向性は再認成績を平均値に従って分類する操作に貢献しない結果及び，類推と教示の係数値に参加者とそれ以外の群と差を示す。

表1. 推理再認成績の区分(数値は正準判別関数係数値)

	集団内対人態度	知識操作(日心発表)
アシテータ	不安(4.72), 人中でも自分の内面に配慮(5.54), 頭を使う(-8.18), 教示(.59)	逐語再認(-11.27), 類推(-3.16), 視点変更(9.58), 分類基準(5.94) Wilksのラムダ値:.126
参加者	教示(8.64), 思考動機(-4.86), 内面に配慮(11.62), 不安(18.91), 目立ちたがり(-16.134)	知識利用(27.04), 類推(-18.86), 歴史が得意(-12.67), 過剰類推(9.12) Wilksのラムダ値:.000
対等	教示(-3.31), 頭を使う(-15.30), 不安(14.10) 評価への不安(-11.86)	知識(12.80), 文字系列(17.83), 類推(2.61) Wilksのラムダ値:.019

考察：参加者群の特徴として，教示に対するメタ認知的な反応として課題志向性の向上は顕在化する反面，類推の不適切さと自己不信並びに討議での他人の評価への配慮から消極的になる傾向を指摘し得よう。結論として，「情報の量と分析」に関する教示を具体的に理解し，上記の文から「商社幹部もトルコも不十分な量の情報を分析に成功」と理解し，内容討議で発言する過程に到達し得ず，閲読内容の構造に関する推論をも含めた検索と想像範囲の理解が不十分な場合には，作業記憶の負荷増も危惧された。以上に関して，Baddeleyの作業記憶観が入力文の統語/意味的処理の枠組を与えたと同様，散文理解での類推の実験の指針となり，作業記憶も活用し得よう。
文献： Baddeley, A. 2003. Working memory: Looking back and looking forward. Nature Reviews Neuroscience, 4, 829-839.